

第 35 回公開研究会 Q & A

Q1. 教科の下支えをする自立活動に主題を設定されたことをうけて、教科と自立活動の関わり合いをもう少し詳しく知りたいです。

全体研究

A1. ご質問ありがとうございます。昨年度、今年度の研究で、自立活動を通して社会情動的能力を育てていく基盤づくりを行ってきました。その基盤を通して、その力がどのように各教科等の学びに影響するのか、来年度以降に研究、もしくは通常の指導の中で検証していくこととなると思います。

Q2. 研究の目的が、「ツールを用いることで、教師の実態把握や支援等の力にどのような影響があるか」というものだったと思いますが、各学部の結果又は考察ではそれに加え、児童生徒の社会情動的能力の向上についても触れられていたと思います。

全体研究

A2. ご質問ありがとうございます。児童生徒の社会情動的能力を向上させるための手段として、教師の実態把握の力が広がったかどうか検証することが大切だと考えておりますので、両者について、丁寧に結果を考察させていただきました。

Q3. 研究テーマを決めるにあたり、協同すること、情動を調整することではなく、目標をもつことを選ばなかった理由を教えてください。また、「目標をもつこと」は、今後どのように進めていくか教えてください。

全体研究

A3. ご質問ありがとうございます。「目標をもつこと」を扱わなかった理由として、1 点目は、「人との関り」と「情緒の安定」が児童生徒の中核的な課題であったこと、2 点目は、以前「児童生徒の課題を解決する力の向上を目指して」の研究において自己理解を扱ったことが挙げられます。自己理解には、「目標をもつこと」と非常に類似する点があるため、自己理解の視点を生かしながら日々支援を行っております。

Q4. 時間における自立活動の指導と、学校教育活動全体で行う指導の関連は、どのようにしていますか？

全体研究

A4. ご質問ありがとうございます。本校では、「情緒の安定」や「人との関り」に中心的にアプローチしていくためには、生活に即した場面で指導を行うことが効果的であるという考えから、時間における指導は、教育課程上に設けておりません。教育課程反省会(カリキュラムマネジメント)において、今年度の研究を踏まえて自立活動の指導がどのような形で実施されることがより効果的であるのかについて、再度検討する予定です。

Q5. 社会情動的能力への対応の難しさを感じました。一人一人異なった調整方法がある中、実態把握からその点を検討していく流れは分かりましたが、なかなか変化が見られないこともあるのではないかと思います。

全体研究

A5. ご質問ありがとうございます。社会情動的能力における情動調整は、子どもに見られる変化が非常に微細なものであるため、丁寧に評価をしていかないと、変化したのかどうか見とることが難しいと考えております。そういった考えから、昨年度は「根拠のある評価」に取り組みました。

Q6.年間計画や個別の指導計画と、ツールのつながりがあれば教えてください。

全体研究

A6.ご質問ありがとうございます。社会情動的能力チェックシートにより、「情動調整(心理的な安定)」と「協同(人間関係)」を発達的な観点から実態把握します。次に、そこで得た個々の「強み」・「弱み」を、自立活動個別の指導計画作成シートにおける区分ごとに実態を記す欄に記入しています。以上のようにツールと自立活動の個別の指導計画を関連させながら作成することを意識しています。

Q7. 模倣という指導法は、支援学校では一般的なのでしょうか。

小学部

A7. 発達という視点から見た「模倣」には、「認知的な面の発達」と「共感性の発達」の2つの重要な役割があると言われています。今回の研究実践では、「共感性の発達」に視点をあてて「模倣」を取り入れました。共感性は、相手の心や気持ちを感じ取ることであり、コミュニケーションの重要な要素の一つです。A 児が模倣を楽しむ中で、人への関心を高め、自分から人に伝えようとする気持ちの素地を育もうと試みました。

Q8. 実践の振り返りの時の話し合いで、より短時間で効果的な話し合いがどのように行われているのか教えてください。

小学部

A8. 学部研究会においては、今年度の研究で活用している社会情動的能力チェックシートに基づいて目標行動を立て、評価基準を設定し、振り返りを行ってきました。評価基準を明確化することで、指導改善のためのより効果的な話し合いをすることができました。また、実践時のビデオを用いて振り返り分析することで、他クラスの学部職員とも有意義な意見交換をすることができ客観的な評価をすることができました。

Q9. 社会情動的能力チェックシートを用いた評価をするにあたって、どのように情報収集がされていたのか知りたいです。

小学部

A9. 今回の事例対象児童を担当した教師は社会情動的能力チェックシートの観点が内在化し、そのような視点を持ち学校教育活動全体を通して子どもと関わるすることができました。また同クラスの担任も、同様にチェックシートの観点をよく理解していたことから、改まった場でなくとも、随時、共通の視点を持ち情報交換ができました。

Q10. 教室の写真のついたブロックを指さしているような拒否しているような様子でしたが、その後実践で使われた「絵カード」はそれと同じ物なのか、違った物なのか？

小学部

A10. 違うものです。動画で使用した、場所の画像がついた木のブロックは、学級で、日々の予定を確認するために、日課ボードの枠に入れて使うブロックです。実践で用いた絵カードは、休み時間にしたいであろう活動を画像にしたものと、本児がその時期に行きたがっていた図書室の画像カードと、トイレの画像カードを用意しました。活動絵カードは、ミニホワイトボードに貼って呈示、場所絵カードは、教室のドアに貼っておきました。

Q11.模倣の場面で、鏡の高さからおんぶだと思うのですが、トイレでのおんぶが気になりました。

小学部

A11.年度当初、トイレでの排泄に拒否を表出しており、トイレでの定時排泄は本児の課題でした。そのため、トイレで排泄できた時のみ、強化子としておんぶをすることにしました。(この時以外は、本児をおんぶすることはありません。)排泄がうまくいった生理的な快感覚と達成感、大好きなおんぶをしてもらえる嬉しさと鏡に映る自分を見る楽しさにより、快情動の条件が重なっており、敢えてこの場面を活用しました。

Q12.模倣等による支援(第3段階)以降、環境調整(第1段階)や絵カードの使用(第2段階)の支援は継続されたのでしょうか。

小学部

(児童Aの変容は、専ら模倣等の支援による成果とみなしてよいのでしょうか?)

A12.児童Aの変容が、専ら模倣等の支援による成果とは言いきれませんが、模倣等による支援は有効であったと考えています。生理的要因や、本人が不安や不快感を感じる要因が重なるような場面では、本児には環境調整がやはり大切だと考え支援しています。第2段階の絵カードの使用に関してですが、スーパートーカーをコミュニケーション手段として活用する支援に移行しています。

Q13.言語方略や協同の場面が増えた児童Aを今後、どのような目標のもとで支援されますか。

小学部

(例えば、非認知的スキルが向上しているの、教科等の内容の指導に力を入れるなど)

A13.情動のコントロールを苦手としている児童であり、感覚の特異性に対する配慮が必要な児童だと考えています。今回の実践により言語方略や協同の場面が増えたとはいえ、情動調整に関する目標設定は継続しています。状況に応じて、本児が既に獲得している言語方略を活用できるようになること、更に言語方略を増やすこと、より望ましい行動方略を身に付けることができるよう支援していくことが大切だと考えています。また、これまで同様、認知面の発達課題にも併せて取り組みます。

Q14.以前の研究で「選択すること」に取り組んでいたと思いますが、絵カードの利用についても、2次元の視覚教材と実際の活動や3次元の場所がどれほど結びついているかは、児童によってそれぞれだということも教えていただきました。そのため、意思表示の手段や選択することについて、丁寧に検討することが大事だと感じます。

小学部

A14.「選択すること」については、ご指摘のとおりだと思います。まずは、児童の興味や関心の高い具体物で二者択一の課題に入念に取り組み、その後、写真や絵カードなどを使った選択動作の学習に移行することが大事だと考えています。その際、知的に重度のお子さんは、提示するイメージ(写真や絵カード)と実物を一致させる過程が必要であり、選択した結果がフィードバックされ、「選択」という行為が意味づけられることが重要だと考えています。そのための視覚教材も、児童にとっての分かりやすさや扱いやすさを考慮することが大切になると思います。

Q15.実践をととしての個別の教材や、教材の変化について教えてください。

中学部

A15.Aさんの感想用紙は当初、シール7種類から選べるようにしましたが、「かわいい」のシールが好きでそればかりを選んでしまうので、シールをやめて、感想を聞き取り、下書きをしたものをなぞるようにしました。その際、本人が自分自身の姿を見て振り返りができるように本人を撮ったビデオを見ながら行いました。

後期は、同じグループの仲間への関心が高まったので、グループの仲間に関する振り返りが表現されるようになりました。11/6の感想では、【きょう、よかったこと】のテーマで、「Bさんのはたけがよかった。かめらまんができてたのしかった。」と書いています。

Q16.支援の中で使用した視覚教材を教えてください。

中学部

A16.Aさんの支援で使用した主なものとして以下の通りです。

- ①授業の流れを理解するため …(授業の流れのイラスト入りプログラム、役割シート、イラスト手元資料)
- ②役割を理解するため …(カメラマンの絵、イラスト入り座席表示、カメラマンバッジ(小道具)、カメラ操作のイラスト入り手順、イラスト入りシナリオ、カメラ操作手順の事前指導用イラスト資料)
- ③自己のふりかえりをするため …(本人の姿を中心に撮ったビデオ)
- ④動画のイメージを作るための環境設定用 …(のれん、寿司・ラーメンのお品書き、カチンコ等の小道具)

Q17.朝の会、授業場面以外でのAさんの「人間関係の形成」に関わる般化について教えてください。

中学部

A17.総合的な学習の時間で先輩が好きになり、自ら言葉をかけたり、先輩の注意を受け止めたりするうちに、Aさんの協同の力は伸び、様々な場面でコミュニケーション行動が見られるようになりました。以下、朝の会以外の場面で社会情動的能力チェックシート(「協同のエピソード」)に書かれたものを中心に例を出しました。

- ・友だちに「〇〇さん～好き?」「なにやったの?」など質問をする。＜質問＞
- ・相手の表情を見て(不快な感情を感じて),「ごめん,ごめん。」と言った。＜譲歩・謝罪＞
- ・落ち着かなくなつて離席した際に、先輩が「Aさん席に着くよ。」と言うと着席した。＜3人以上の集団での応答による行動調整(教師が直前に注意しても笑っているだけだったが、先輩の注意は受け入れた)＞
- ・給食前に昼休みの遊びを約束する言葉が自発で出る。「〇〇さん、おにごっこしよう。(自分がやりたいこと)」「〇〇さんソフトボール行こう。(友だちが好きなこと)」＜活動のプランに関するアイデアの提案＞

Q18.グループ分けの基準を教えてください。

中学部

A18.グループ分けの基準として、以下のことが考えられます。

- ①人数…人間関係の形成を構造化した環境で学ぶには、2人が望ましいが、支援体制が作れないため、3人グループが中心でした。ただし、困り感の大きい生徒は同じクラスの2人コンビとしました。
- ②関係…3人の場合、キーとなる生徒（活動参加が比較的難しい生徒）との関係づくりをチェックし、仲立ちとなる生徒がいるよう想定しました。
- ③差異…基本的に学年を縦割りにしました。個人差があり、その差が教育的な効果を生むと考えられるグループ編成にしました。

やってみて分かったことは以下の通りです。

- ・2～3人のグループは役割設定がしやすい。高次になると、カチンコと監督を兼ねるなど、役割を複合させることも有効であった。クラスの中で仲よしの友達を模倣する場合も2人グループの機能があると考えられる。
- ・3人グループの場合、発達段階がより近い生徒をモデリングする傾向があった。

Q19.不安で喋ってしまうAさんが落ち着いて撮影するまでに具体的にどのような支援がありましたか。

中学部

A19.第一に、役割が理解できるようにする支援がありました。役割を理解できるようにするための視覚的な支援、環境設定です。個別の教材等については中学部Q1、Q2をご参考ください。

第二に、仲間との関係づくりです。今回の実践は生徒が他の生徒から学ぶ、活動を通して学ぶ、が基本です。Aさんは、みんなに注目を受けてキャストを行うときには生き生きと参加しました。

ですが、カメラマンの役割で他の生徒の真似をすると、（その模倣が不十分であるために）動画の振り返りの際に他の生徒から注意を受けてしまいます。自信がないところに注意をされて、不安定になっていました。

この課題の改善のきっかけとなったのは、Aさんのグループの仲間が好きになった、ということでした。休み時間に自分の見えるところに先輩がいると、名前を呼ぶようになりました。Aさんが他の学年の生徒の名前を覚えてたということで、みんなに感心されたり、褒められたり。それで、一層Aさんは先輩が好きになりました。明るいAさんが頑張ると、中3の先輩が褒めてくれます。それが媒介にもなって、Aさんは総合的な学習の時間の授業がさらに好きになりました。

このように ①仲間が好きになり、仲間表現しやすくなる ②仲間の言うことを受け入れるようになる ③役割の活動への集団参加が変わる、という経過でAさんは変わっていききました。

Q20.成果の維持、定着の状況について教えてください。

高等部

A20.実践終了後も、社会情動的能力の向上を目指して継続的に支援しています。作業学習の休憩時間に他学年の友達と話をしたり、友達の様子をよく見て話しかけたりする場面が見られます。時には自分の意に反することで大きく情動を乱す（怒る、文句を言う）こともありますが、教師に向かって気持ちを吐き出すこと（相互調整始発）を行うことで、気持ちを整えて活動に参加することができるようになりました。

Q21.実践を通した個別の教材教具の変化や細かい支援方法等について教えてください。

高等部

A21. 高等部では、個別の教材教具よりも個別の支援方法（主に言葉かけの仕方）に変化がありました。

①実践前から実践初期 直接的支援でスキルへの働きかけが中心

例：「〇〇なときは～と言ってください」

②実践中期 間接的支援で本人の気づきを促す支援が中心

例：「（友達）〇〇さんは報告が素晴らしいですね」

③実践後期 教材教具の工夫で本人の経験の広がりや興味関心の高まりを目指した支援が中心

例：「現場実習ではどんな仕事をしましたか」

Q22.現場実習先の方に事例生徒についてどのように伝えていましたか。

高等部

A22.本校高等部では、教師と実習先の方との打合せの際に、教育支援計画をもとにして生徒の特性を伝えています。事例生徒の場合は、特に心理とコミュニケーションについて丁寧に伝えました。打合せの内容を受けて、施設長を中心に事業所の方が雑談をしてくれたり、たくさん誉めたりしていただきました。また、実習後半には、本人の思い通りにならないこともあり、気持ちが沈み、伏せてしまい仕事に取り組むことができないこともありました。しかし、実習最終日にお別れ会を開いてくださったり仕事ぶりを認めてくださったりしたことで、自分のことを大切にしてくれたことが実感でき、達成感をもって実習を終えることができました。

Q23.日常的な活用に向け、様々なアプリを活用されていましたが、教員間でのアプリの検討や情報の共有はどのようにされているのか気になりました。

ICT

A23.本校ではまだまだ個々の教員が担当する児童生徒に合わせたアプリを使っている段階で、全体でアプリを検討する場や情報を共有する仕組みがないのが現状です。今回実践報告をするにあたり、その点の課題が出てきたことで、現在教材の共有フォルダを作成中です。

Q24.授業場面について ○×で結論付けてしまうことに少し疑問を感じました。インフルやコロナにかかることは悪いことではないですが、かかることは○ということでもないのかなと思います。直接面と向かっていない、リモートだからこそ、多様性を大切にする意識が大事だと感じました。

ICT

A24.ご指摘ありがとうございます。今回はリモート授業における進行の様子や生徒の反応についてご覧いただきたいというねらいがあり、あの場面を取り出しましたが、やはり学部内でも授業の反省としてまったく同じ意見が出されました。保健の授業はWithコロナの時代にとっても重要なものであり、改善として「かかってしまった人を責めることはどうか？」という点を生徒が考えることができるようにしていきたいと思っています。

リモートでも対面でも生徒の実態差がある中で座学的な内容を進める際には、クイズ形式による解答の選択式という手法は有効であると考えています。授業の全体である程度の内容を取り扱い、後半は学年の実態に合わせてさらに内容を深める中で、今後も多様な考え方は大事にしていく点を意識して授業づくりを行っていきたいと思います。

Q25.授業等に様々なアプリを使用していましたが、それらは無料のアプリで賄えているのでしょうか。もし、有料のアプリを使用しているのであれば、アプリの購入や使用料をどのように予算付けているのかを知りたいです。

ICT

A25.現在活用しているアプリは既存のアプリ及び無料のアプリのみです。有料版のアプリも一部ありましたが、教師個人の端末での使用です。来年度から一人一台端末になる中で、有料アプリの取り扱いは大きな課題です。購入自体は一括管理を行うシステムの中で行える予定ですが、使用料については定額のものから月額のものまである中、共通で使うアプリ以外に児童生徒個々にあったアプリの活用も想定しているため、有料アプリを個の端末に入れる場合の使用料をどうするかはまだ検討課題となっております。

Q26.情報機器の活用方法のアイデアについては、そういった機器の得意な方がいるのでしょうか。それとも校内外の研修等でヒントを得ているのでしょうか。

ICT

A26.動画配信に関しては、音楽を趣味にしている先生が動画配信サービス上の操作を中心的に行っていました。その他については、特に秀でていたという先生はおらず手探りで進んでいったという感じです。活用方法や機器操作等の仕方、トラブルへの対処など最近ネット上で検索すると動画での説明含め、何かしらものに辿り着くかと思います。

最近SNS上でもICT活用の情報共有グループも多く存在しており、全国の多くの先生方、学校での取組みが公開研や研修会に限らず発信されており、大変参考になるかと思います。(個人的にはとても参考になりました。)

Q27.児童生徒の発達に応じて、ICTを効果的に取り入れるために工夫されている点、注意されている点を教えてください。

ICT

A27.まだ学校全体での取組みにまで至っていないため、本年度試行的に行った学級の中でのこととしてお答えいたします。実践報告にもあった中学部1年生の学級では、普段使いとなるように常に学級で使えるよう制限をかけることはしませんでした。

中学部の実践であったコンビでの動画撮影では、授業場面だけでの使用では楽しくなってしまう撮影ボタンを押し続けてしまう生徒もいました。そのため、タブレットで撮影して記録に残したり画像として提示したりすることが便利であることを理解することができるよう、他の授業や日常生活の中でもできるだけ多く活用するようにしました。

【協同研究者：永田真吾 准教授より】

児童生徒の認知面について考慮する必要があります。情報の入力面では聴覚／視覚情報の得意・不得意、情報の出力では音声言語・キーボード操作・フリック入力・タップ・手書きのどれが良いか、児童生徒の実態から考えていくとよいでしょう。ICT活用の考え方は「教員主導」から「学習者中心」へ、「特定場面での使用」から「日常使い」へ、「仕事、娯楽の手段」から「個人の知的活動を支える道具」へと変容している最中です。まずは使ってみる、その中でどのようにICT機器と付き合っていくか児童生徒と共に向き合い、「どのように用いると危ないのか」ばかりでなく、「こうすることでもっと世界は広がっていく」という視点も併せて使いこなしていきたいですね。

Q28.革新的で多種多様な取り組みが学校全体を挙げて取り組まれている印象をもちました。このような取り組みが行われている要因について知りたいです。(例えば、ICTに関して積極的に取り組もうとする先生方が多い、新たな取り組みを積極的に取り入れようとする風土が学校にあるなど)

ICT

A28.残念ながらまだまだ学校全体で取り組む段階になっていないのが正直なところで、試行的に行った実践の中から各学部、個々の児童生徒の実態に合わせた取組みを来年度以降本格化していきたいと検討している段階です。ただ、このコロナ禍と GIGA スクール構想により、何かしらやっていかなければという思いから“まずは使ってみよう”という先生方や“こんなことできないかな”といろいろな授業構想をもった先生方の思いはあったと思います。